永遠の真理

Eternal Truth

2018年 12月

「恐れるな、小さい群れよ」「天からの良い知らせ（1）」「わが契約」「半月餅」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

天からの良い知らせ（I） 4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ 7

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「わが契約」 39

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

半月餅 44

お話コーナー

「ゲッセマネにて（I）」 46

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465　FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス　www.4angels.jp

メール　support@4angels.jp

発行日　2018 年 11 月 4 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty images on Front page, Sermon View on page 40

Printed in Japan

日々、何事をするにも

私たちは…常に私たちの全能力を最上の目的のために用いることを神から要求されていると私は信じる。私たちは…いつもお互いに交わり、そして神の栄光のためにすべてのことを行なうべきである。

私たちは自己に課せられた義務をいっそうりっぱに果たすことのできるような方法で、また私たちの感化が私たちの交わっている人々に対していっそう有益となるような方法でレクリエーションを行なうことができるし、またそうすべきである。……

子供や青年には、運動をするときにも自分自身の役に立ち、他人にも益となるような何かを行なおうという野心を目ざめさせねばならない。知力や品性を発達させる運動や、手を有効に用いるように教え、青年に人生の重荷のわけ前を負わせるように訓練する運動は、体力を与え、あらゆる能力を活発にする。そして高潔な勤勉さと、善行をしようとする生活習慣を養うことの中には、必ずよい報いがある。

青少年たちにとって、自分のためだけのレクリエーションよりは、他人のためになるレクリエーションのほうが、はるかに大きな祝福となる。子供というものは生まれつき熱心で、感じやすいので、人のことばをすぐに受け入れる。(アドベンチスト・ホーム 582, 583)

大教師イエスは、聴衆を自然の事物に接触させて、あらゆる被造物の中に語られている声をきかせ、そうして彼らがなごやかな気持ちになって素直な心をもったときに、目の前にながめている自然の風物から霊的な教えを解きあかされた。‥‥ キリストの教訓の中には、一人びとりの心に興味を起こさせ、一人びとりの感情に訴える何ものかがあった。このようにして、日々の仕事は、高い理想の失われた単なる骨折りのくりかえしとならないで、たえず目に見えない霊的なものを心に思い出すことによって、明るくそして向上したものとなった。(アドベンチスト・ホーム 151)

キリストは、単に安息日ばかりでなく、普通の労働の日にも、教訓を結びつけられた。‥‥ 畑にあぜを作って種をまき、耕しては収穫を刈りとるということから、キリストの恵みがどのように人の心の中で働くかを学ぶように、主はお教えになる。こうして、どんな職業に従事し、どんな社会にいようとも、そこで神の真理を学ぶようにイエスは望まれる。そうするとき、日常の雑事に心を奪われて、神を忘れることはない。…神の思いは、黄金の糸のように、わたしたちのすべての家庭の仕事や職業の中に一貫して見られるようになる。…わたしたちは、天の真理を学び続けて、主の純潔なお姿へと成長し続けることであろう。(アドベンチスト・ホーム 150, 151)

聖書の教え–現代の真理–

第 8 課　天からの良い知らせ（I）

周りを見る

わたしたちは動きが早い近代の世の中で暮らしており、そこには洗練された新しいメディアが備えられています。そのメディアは全世界を網羅しており、そこの住民には重大な出来事が起こるといつでもみなその情報が伝えられます。残念なことに、ニュース報道の大半は、大惨事や悪事に関する扇情的なものです。わたしたちは、犯罪、戦争、飢饉、災害、および残虐な行為について聞きます。人々がこれらの堕落について考えるとき、心は恐怖で満たされ、またその悪事の結末についていぶかります。しかし、もしわたしたちが神のみ言葉を学ぶならば、わたしたちは驚いたり恐れたりする必要はありません。これらすべての出来事は、何世紀も前において、キリストご自身の説明によって預言されました。「戦争と騒乱との噂を聞くときにも、おじ恐れるな。こうしたことはまず起こらねばならないが、終わりはすぐにはこない。それから彼らに言われた。『民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。』。…人々は世界に起ころうとすることを思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。」（ルカ 21:9, 10, 26）

この世の出来事に関するこの正確な記述は約 2,000 年前に書かれましたが、それと共に、イエスはわたしたちに永遠の贖いを約束した確証の素晴らしいメッセージを与えて下さいました。

「これらの事が起こり始めたら、身を起こし、頭をもたげなさい。あなたがたの救いが近づいているのだから」（ルカ 21:28）。

神の知らせは、悪を強調したり扇動したりすることはありません。かえって、問題を取り上げた上で、警告に注意を向ける人々に希望を与えます。これこそ、「うそをつくことができない」（テトス 1:2）神からの真に良い知らせです。これらの「良きおとずれ」は、聖書の中で「福音」として知られています。福音のメッセージを理解し、感謝する必要があります。

パウロが福音を定義する

「福音」という言葉は、世界中のクリスチャンと自称する何百万人もの人々に用いられていますが、その本当の意味を理解している人はごくわずかにすぎません。使徒パウロは、最もすぐれた定義を与えています。「わたしは福音を恥としない。

それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」（ローマ 1:16）。

パウロは福音について「力（パワー）である！」と述べています。力とは、生きた原動力であり、役に立つ点においてもなし遂げる点においても、力強いものです。わたしたちにとって力は非常に重要なため、産業や交通機関に力を供給し、個人の家庭で用いるために、わたしたちは発電所（パワーステーション）を建設します。この例示によって、わたしたちは何が福音であるかについて理解が与えられます。それは神の力であり、わたしたちのために何かを成し遂げることができるものです。それは、限定された力ではなく、永遠にして全能なる神ご自身の力そのものなのです。神は、存在するあらゆる力の供給元です。イエスは、その事実をご自分が弟子たちにお教えになった祈りの中で認めるべきことをわたしたちに教えて下さいました。「力は…汝のものなればなり」。

この無限の限りない神の力はわたしたちに救いをもたらすために与えられます。ここで多くの人々は、救いとは単純に「天国に行くこと」であると信じて誤りを犯しています。救いとは、「救われること」を意味しますが、何から救われなければならないのでしょうか？わたしたちは、その答えをわたしたちの主の御名そのもののうちに見いだします。「…その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」（マタイ 1:21）。

親愛なる友人のみなさん、そのとおりです。福音はこの地上で今、罪からの救いをわたしたちにもたらすのです。神は、みなさんを罪の力から救い出し、またあなたの内にご自身の義をおいて世に現れるようにしたいと望んでおられます。

「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである。」（ローマ 1:17）。

救うのに力強いこの救いの力は、どこで、どのように得られるのでしょうか。使徒パウロは次の言葉を述べて、その答えを示唆しています。「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である」（コリント第一 1:18）。

イエスが神の力を最も力強く証明されたのは、十字架上においてでした。ここでご自分が勝ち取られた勝利をわたしたちに無償の賜物として提供して下さるのです！これがまさに、「福音」です。

いつ、どこに福音の起源があるか？

多くの人々は、福音が新約聖書に起源を持つと信じていますが、注意深く聖書を研究すると、福音は人類そのものより古いことがわかります。黙示録にはキ

リストについて次のように記されています。「世のはじめからほふられた小羊」（黙示録 13:8 英語訳）。

これは、人の贖いのために神の強力な力の備えがなされたのが、人の創造される前であったことを意味しています。ですから、はじめの両親の堕落直後に、福音が直ちに活動を始めました。

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。」（創世記 3:15）。

ここでアダムとエバと全人類とは、サタンから救出されるという約束を受けました。サタンの頭はキリストが十字架上で勝利されたときに砕かれるのでした。

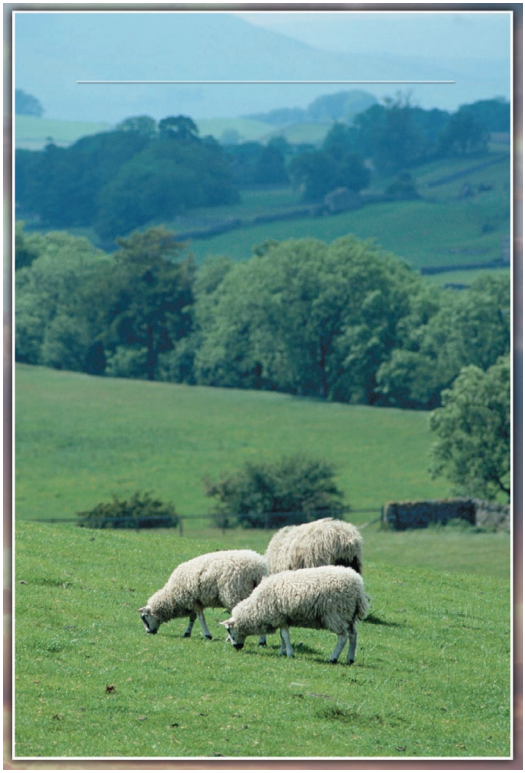
アブラハムは、福音が説かれた人のごく初期の例です。「聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを、あらかじめ知って、アブラハムに、『あなたによって、すべての国民は祝福されるであろう』との良い知らせを、予告したのである」（ガラテヤ 3:8）。

これと同じ福音は、旧約聖書においてイスラエルに宣布されました。「というのは、彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが、聞いた者たちに、信仰によって結びつけられなかったからである」（ヘブル 4:2）。

この句はまた、どのようにすればわたしたちが無限の価値をもつ福音を受け取ることができるかについても述べています。わたしたちはそれをただ「信仰によって」のみ受けることができるのです。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

12 月

12月1日

惑わし―終わりのしるし

「〔イエスが〕オリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、『どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』。そこでイエスは答えて言われた、『人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう』」（マタイ 24:3-5）

人々を惑わし、多くの人々を荒野に導いた偽キリストが現れた。魔術師と魔法使いは、奇跡的な力があると主張し、人々を従えて人里離れた山に導いた。しかし、この預言は終わりの時のためにも語られたのである。サタンによって霊を受けた集団が、惑わし欺くために結成される。これが再臨のしるしとなるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1898 年 12 月 20 日）

サタンはこの最終時代に、滅ぶべき者たちのうちにあらゆる不義の欺瞞を働こうとやってきている。彼の悪魔的な威光は、偽預言者や人々の目の前で奇跡を行い、確かに自分はキリスト本人であると主張する。サタンはその欺瞞において、彼を支援している者たちにその力を与える。従って、神の偉大な力を持っていると主張する者たちを識別することができるのは、優れた探知機、すなわちエホバの律法だけである。主はわたしたちに、できれば彼らは選民をも惑わそうとするであろうと教えておられる。羊の衣はあまりにもそっくりで本物のように見えるため、わたしたちが神の偉大な道徳的基準に照らし、彼らがエホバの律法の違反者であることを発見しない限り、狼を識別することができないであろう。

わたしたちが信仰と霊的啓発を必要としているときがあるとしたら、それは今である。努めて祈り、神の御心を知って行う熱心な願いをもって聖書を日毎に学んでいる人々は、いかなるサタンの惑わしによっても迷わされることはない。狡猾な人々が欺き誘惑するために用いる口実を見分けられるのは、彼らだけである。あまりにも多くの時間と注意が世に向けられ、また衣服や飲食に払われているので、祈りと聖書研究のためには時間が残っていないのである。（同上 1885 年月 25 日）

サタンは、ただ世俗の人々を捕えるばかりでなく、わたしたちの主イエス・キリストの教会であると公言する諸教会をもパン種のように徐々に変化させている。大背教は、一寸先も見えない真夜中の暗黒にまで濃くなっていくことであろう。これは、神の民にとっては、試練の夜、嘆きの夜、真理のために迫害を受ける夜となる。しかし、その暗黒の夜から、神の光が輝くのである。（キリストの実物教訓 391）

最大の地震が
終わりの前兆を告げた

「戦争と騒乱とのうわさを聞くときにも、おじ恐れるな。こうしたことはまず起らねばならないが、終りはすぐにはこない。それから彼らに言われた、民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。また大地震があり、あちこちに疫病やききんが起り、いろいろ恐ろしいことや天からの物すごい前兆があるであろう」（ルカ21:9-11）

この預言〔ルカ 21:25，マルコ 13:24-26．黙示録 6:12〕の成就として、1755年に、これまでの記録を破る恐ろしい地震が起きた。これは、一般にリスボンの地震と言われているが、ヨーロッパの大部分、アフリカ、アメリカにも及んだ。グリーンランド、西インド諸島、マデイラ島、ノルウェー、スウェーデン、大ブリテン（英国）アイルランドでも感じられた。その範囲は、400万平方マイルに及んだ。アフリカでは、ヨーロッパと同様の激震であった。アルジェは大半崩壊した。そしてモロッコ付近の、8千から1万人ぐらいの人口をもっていた村が陥没した。……

地震が特に激しかったのは、スペインとポルトガルであった。カディスでは、押し寄せる波の高さが、60フィート（約18メートル）もあったという。「ポルトガルの高山のいくつかは、あたかもその根底から覆えされるかのように、猛烈に震動した。そのうちのいくつかは頂上が開いて、異様な形に裂けて割れ、巨大な塊が隣接した谷間に崩れ落ちた。これらの山々からは炎が噴き出たと言われている。」

リスボンでは、「雷のような音が地下で聞こえたかと思うと、その直後に激しい震動が起こって、市の大部分が倒壊した。6分ほどの間に6万人死んだ。……

「震動後直ちに、すべての教会や修道院、ほとんどすべての大建造物と家屋の四分の一以上が倒壊した。震動後約一時間のうちに、各地から火事が起こり、3日近くも非常な激しさで燃えつづけ、都市は全滅した。地震は聖日に起こり、教会や修道院は人々でいっぱいだったが、逃れた者はほとんどいなかった。」……この恐るべき日に生命を失った人の数は、九万と推定されている。（各時代の大争闘上巻 391-393）

12月3日

目をみはるような象徴

「わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚す名がついていた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。……とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。」(黙示録 13:1, 2, 10)

〔ひょうに似ている獣の〕この象徴は、たいていのプロテスタントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が握っていた力と位と権威とを継承した法王権を表わしている。ひょうに似た獣について、次のように言われている。「この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、・・・・そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」ダニエル書 7 章の小さい角の描写とほとんど同じであるこの預言は、疑いもなく法王権を指している。(各時代の大争闘下巻 158)

第六世紀に至って、法王権は確立した。その権力の座はローマに置かれ、ローマの司教が全教会の首長であると宣言された。……キリスト者たちは、神に対する忠誠を放棄して法王教の儀式と礼拝を受け入れるか、それとも、地下の牢獄に幽閉され、拷問や火刑、また斬首吏のおので生命を失うか、そのどちらかを選ばねばならなくなった。(同上上巻 49)

「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた」と預言者は言っている。また、「とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない」とある。42 か月は、ダニエル書 7 章の「ひと時と、ふた時と、半時の間」、つまり 3 年半、すなわち 1260 日と同じで、その期間のあいだ、法王権は神の民を圧迫するのであった。この期間は、……法王権が至上権を握った紀元 538 年に始まり、1798 年に終わった。この時、法王はフランス軍の捕虜になり、法王権は致命的な傷を受けた。「とりこになるべき者は、とりこになっていく。」(同上下巻 158)

諸天は終わりの前兆を告げた

「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう」（マタイ 24:29）

教会の長い試練の期間、すなわち、1260 年間にわたる法王権の迫害について述べ、その苦難は短くされると〔キリストは〕約束された。それから、再臨に先だって起こる諸事件をあげて、その最初のものがいつ起こるかを定められた。「その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ」（マルコ 13:24）。1260 日、すなわち 1260 年は、1798 年に終わった。その四半世紀前に、迫害はほぼ完全にやんでいた。キリストの言葉によれば、この迫害のあとで日が暗くなるのであった。1780 年 5 月 19 日に、この預言は成就した。

「この種の現象として、他に類例がなく、最も不思議で説明することができないものは……1780 年 5 月 19 日の暗黒日である。これは、ニュー・イングランド地方の空全体をおおった不可解な暗黒である。」（R.M. ﾃﾞｨｰｳﾞｪﾝｽ著「わたしたちの初世紀」89 引用）。暗黒が日食によってではないということは、そのとき月がほとんど満月であったという事実によって明白である。それは雲によって、あるいは大気が濃くなったことによって起こったのではない。なぜなら、暗黒が及んだある地方においては、星が見えるほど空は晴れていたからである。科学がこの兆候への納得のいく原因を特定できないことに関して、天文学者であるハーシェルは「北アメリカの暗黒日は、哲学がどう説明してよいのか分からない自然の不思議な現象である」と宣言している。……

1780 年 5 月 19 日は、歴史上「暗黒日」となっている。モーセの時代以来、これほどの濃さと広さと時間的長さをもった暗黒は、記録されていない。（各時代の大争闘上巻 393, 396）

「天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた」（黙示録 6:13）。この預言は、1833 年 11 月 13 日の大流星雨によって、顕著にまた印象的に成就した。これは、有史以来の最も広範囲に及ぶ驚くべき落星の光景であった。……一言で言えば、全天が活動しているように見えた」（R.M. ﾃﾞｨｰｳﾞｪﾝｽ著「アメリカの発展」もしくは「最大の世紀の大事件」28 章 1-5 段落」引用）。（同上下巻 22）

12月5日

十誡が開かれた

「諸国民は怒り狂いましたが、あなたも怒りをあらわされました。そして、死人をさばき、あなたの僕なる預言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、すべて御名をおそれる者たちに報いを与え、また、地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」。そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った」（黙示録 11:18, 19）

聖なる幻のうちに、ヨハネは天の聖所に入れられた。彼は「天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。その後、わたしが見ていると、天にある、あかしの幕屋の聖所が開かれ」たと言っている（黙示録 11:19; 15:5）。モーセが造るようにと命じられた聖所は天の聖所の原型にならったものであるべきであった。契約の箱には、神の指によって書かれた十誡が置かれていた。地上の契約の箱の中に置かれていた律法は、天にある証の契約の箱に入れられていた律法の写しであり、エホバの戒めは不変である。十誡は品性の道徳的標準を構成している。神はご自分の律法に対して人の側に完全な従順を要求しておられる。そして行うようにと律法のうちに書かれているすべてのことを守り続けない一人ひとりに対してのろいが宣言されている。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1894 年 6 月 11 日）

恵みの下での神のご要求は、エデンで要求されたものとまったく同じであり、それは神の律法への完全な服従である。裁きにおいて、神はクリスチャンであると告白する人々に、なぜあなたはわたしの子を信じると主張しながら、わたしの律法を犯したのかとお尋ねになる。だれがあなたにわたしの義の規定を踏みつけるように頼んだか。……新しい契約の福音は、罪人を罪のうちに救うために、古い契約の標準をその人に合わせて低めたものではない。神はご自分の臣下のすべての者に従順、すなわち神のすべての戒めに対する完全な従順をお求めになる。神は今も昔も、天への唯一の資格として、いつも完全に義であることをお命じになる。キリストがわたしたちの希望、また避け所である。このお方の義は従順な者だけに与えられる。天父がわたしたちのうちに罪を見いだされることのないよう、信仰によってこのお方の義を受け入れよう。しかし、聖なる律法を踏みつけた人々には、その義を要求する権利はない。ああ、わたしたちの贖いの犠牲なるイエス・キリストを通して自分たちが神に対して平和を得ていることを信じ、神のすべてのご要求に従順な子供として、救いの計画の広大さを見ることができるように。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1886 年 9 月 21）

12月6日

裁きの時のメッセージ

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』。」（黙示録 14:6, 7）

神のさばきの時を知らせ、神をおそれ礼拝するよう人々に呼びかけた、黙示録一四章の第一天使のメッセージは、神の民と称する人々を世俗の悪影響から引き離し、世俗化と背信という彼らの真の状態を認めさせるためのものであった。この使命によって、神は教会に一つの警告をお与えになった。もし彼らが、それを受け入れていたならば、彼らを神から閉め出していた害悪を正すことができたのであった。もしも彼らが、天からのメッセージを受け入れ、主の前に心を低くして、み前に立つ準備を真心から求めていたならば、聖霊と神の力が、彼らの間にあらわされていたことであろう。教会は再び使徒時代の時のような、一致と信仰と愛の幸福な状態に到達していたことであろう。使徒時代には信者たちは、「心を一つにし思いを一つにして」「大胆に神の言を語り、」「主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」（使徒行伝 4:32, 31; 2:47）。（各時代の大争闘下巻 79）

「神のさばきの時がきた」という告知は、人類の救いのためのキリストの務めの最後の働きを指している。それは、救い主のとりなしが終わり、彼がご自分の民を迎えるために地上に帰られるまで宣布しなければならない真理を伝えるものである。1844 年に始まった審判の働きは、生きている者も死んだ者も、すべての者の運命が決定されるまで継続しなければならない。したがって、これは、人類の恩恵期間の終わりまで続くのである。人々に審判に立つ準備をさせるために、メッセージは、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。」「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」と彼らに命じている。これらのメッセージを受け入れる結果は、「ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある」という言葉で表わされている。審判に対する備えをするためには、人は神の律法を守らなければならない。その律法が、審判の時の品性の規準となるのである。（同上 154）

12月7日

幼子らによって
宣べ伝えられるメッセージ

「さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか。また義人でさえ、かろうじて救われるのだとすれば、不信なる者や罪人は、どうなるであろうか。」（ペテロ第一 4:17, 18）

多くの場所において、再臨の真理の宣布を妨げるために、聖職者の力が行使され、主は幼い子供たちを通してメッセージを送ることを喜ばれた。彼らが未成年者であったので、国の律法は彼らを禁ずることができず、彼らは自由に妨げられずに語ることを許された。そのようにして、まもなくやってくる裁きの警告が人々に告げられた。これは約九ヵ月間続いた。その後、子供たちへの感化力は当局によって病気だと宣言され、彼らの幾人かの者は病院に連れて行かれた。しかし彼らの口は封じられなかった。なぜなら彼らは、神が彼らを証人として用いることをお選びになる限り、宣べ伝えたからである。

運動は 1842 年の秋に始まり、1843 年の冬にわたって続けられた。これらの子供たちを通して成し遂げられた働きについて語りながら、ある目撃者は次のように言っている。……6 才もしくは 8 才くらいの子供が彼らの間を行き来していた。そして、彼らは彼女に質問したが、彼女は普通の子供が答えるような返答をした。人々が集まってきて、ついには家が大勢の人々によって囲まれた。最後の者が到着すると、彼女の様子は大胆さにおいても動きにおいても一変し、彼女が生来の賜物によらず、目に見えない力によって動かされていることを明白に示した。彼女が語り始めると、声も一変した。彼女は言った。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」（黙示録 14:7）。彼女は飲酒、盗み、姦淫、罵り、中傷といった罪を譴責し、また、神のみ言葉を聞き、自分たちの生活をそれに従わせる代わりに、世俗的仕事を考えながら教会に出席している礼拝出席者を譴責した。彼女の声と言葉は印象的であった。多くの者たちは泣き、ため息をついていた。彼らは自分たちには悔い改める時間が与えられているが、彼らはそれを今すぐしなければならず、それを遅らせてはならないと言われた。

わたしたちは打ちひしがれ震える心で家に帰った。わたしは自分が注意深く学んできたと思っていた聖書を手に取り、そしてさらに深く研究した。わたしは次の週はとても働くことができなかった。わたしの思いは絶え間なく神のみ言葉と、おそらくまだ読むことさえ習っていないあの小さな子供から聞いた鋭い譴責と説明に集中していた。（ﾋｽﾄﾘｶﾙ・ｽｹｯﾁ・ｵﾌﾞ・SDA ﾐｯｼｮﾝ 205, 206）

12月8日

バビロンの堕落

「また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』」（黙示録 14:8）

第一天使のメッセージが与えられた時、それを聞いたすべての者たちはそれを受け入れるように、またそれを受け入れることによってもたらされる祝福を分かち合うようにと招かれた。しかし多くの者たちはその呼びかけを軽蔑し拒否した。ある者は自分の農場へ向かい、また他の者は自分の商売品へ向かったりして、彼らはこれらの事柄に関心を持たなかった。霊感は洪水前の人々がノアの言葉を拒否したとき、神の「霊は人の中で争わなくなった」。そのように、神が憐れみのうちに人々に送られる警告を彼らがいま軽蔑するなら、このお方の霊はしばらくして彼らの心の中に自覚を起こすことを止める。神は光が送られるのは、大事に従うためであって、軽蔑して拒否するためではない。このお方が送られる光は、それを軽視する者たちにとって暗闇となる。神の霊が人の心に真理を印象づけることを止めるとき、聞くことはみな無駄であり、説教もまたみな無駄である。

教会が再臨のメッセージを拒絶することによって、神の勧告をはねつけたとき、主は彼らを拒絶された。第一の天使に、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」と宣言している第二の天使が後に続いた（黙示録 14:8）。このメッセージは、第一のメッセージを拒んだ結果、諸教会が道徳的に堕落したことを告知するものとして再臨信徒に理解された。バビロンが倒れたという宣言は、1844 年の夏になされ、結果としてこれらの教会から約五万人が脱会した。

バビロンという言葉は、ババルに由来し、混乱を意味しており、聖書の中では様々なかたちの偽りや背教の宗教に適用されている。しかしバビロンの堕落を告げているメッセージは、かつては純潔ではあったが、堕落した宗教団体に適用されなければならない。ここで意味しているのは、ローマ・カトリック教会ではありえない。なぜならその教会は何世紀もの間、堕落した状態にあったからである。しかし、自分たちの教理を聖書から得ていると公言しているが、ほとんど数え切れない教派に別れているすべてのプロテスタント教会に適用させるとき、その象徴はなんと適切であることであろう。キリストが祈られた一致は存在しない。一人の主、一つの信仰、一つのバプテスマの代わりに、無数の相反する教義と理論が存在している。宗教上の信仰があまりにも混乱し調和していないように見えるので、世は真理として何を信じてよいか分からないのである。（預言の霊 4 巻 231-233）

12月9日

第三天使のメッセージ

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない』」（黙示録 14:9-11）

第一と第二のメッセージは 1843 年と 1844 年に伝えられ、わたしたちは今、第三の布告の下にいる。しかし、三つともすべてのメッセージがなお宣べ伝えられるべきなのである。（ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 2 巻 104, 105）

獣とその像を拝むことに対して宣告されている恐るべきさばきについて知るとき（黙示録 14:9-11 参照）、だれでもみな、獣の印とは何か、それを受けないようにするにはどうすればよいかということを学ぶために、熱心に預言を研究するようになるはずである。（各時代の大争闘下巻 360）

神を拝む者たちが、第四条を尊重することによって特に区別される。なぜならこれは、神の創造の力のしるしであり、神が人間に崇敬と服従を要求なさる権利を証言しているからである。悪人は、創造主の記念を踏みにじり、ローマの制度を高めようと努めることによって区別される。全キリスト教世界の争いの問題点は、二つの大きな部類、すなわち神の戒めを守りイエスの信仰を守る者たちと、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者とに分けられる。（教会への証 9 巻 16）

過去においては、聖書の安息日を守っていると信じて、日曜日を守ってきたキリスト者たちがいた。また、日曜日は神が定められた安息日であると心から信じている真のキリスト者たちが、今も各教会におり、ローマ・カトリック教会も例外ではない。神は彼らの真剣な心と神の前での誠実さを受け入れられる。しかし、日曜日遵守が法律によって強いられ、真の安息日を守るべきことが世界に明らかにされるその時に、神の戒めを破って、単にローマの権威によるものにすぎないところの戒めに従う者は、それによって、神よりも法王教をあがめるのである。そのような人は、ローマに敬意を払い、ローマが定めた制度を強制する権力に敬意を払っている。彼は、獣とその像を拝んでいる。（各時代の大争闘下巻 170, 171）

12月10日

キリストの勧告

「あなたは、自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい。すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。」(黙示録 3:17-19)

「熱心になって悔い改めなさい」というのが、ラオデキヤ教会に対するイエスの勧告である。悔い改めるべきことがある。世的な思い、利己心、貪欲は、彼らの霊的生活をむしばんできた。彼らは自分たちが富んで、豊かになり、なんの不自由もないとうぬぼれているが、その一方でキリストは彼らが「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者である」と宣言される。

教会を脅かしている最大の危険は、世に対する愛着である。ここから利己心や貪欲という罪が生じる。多くの者にとって、地上の宝を得れば得るほど、ますますそれに愛着を持つようになり、そしてなおもっと得ようと手を伸ばすのである。……

サタンはキリストに従う者たちを滅ぼすために、考案することのできるあらゆる手段を用いる。驚くべき技術と狡猾さとをもって、彼は各自の固有な特性に合わせて誘惑する。生まれつき利己的で貪欲な者には、彼らの道に繁栄を投げかけることによって誘惑する。サタンは彼らが自分たちの生まれつきの特性に勝利しないなら、富に対する愛が彼らをつまずかせ、堕落させることを知っているのである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1883 年 9 月 4 日)

ラオデキヤ教会へのまことの証人の勧告が生じさせた率直なあかし……は、受ける者の心を動かして、高く旗をかかげさせ、率直な真理を語らせる。ある者は、この率直なあかしを聞くにたえない。彼らは、それに反対して立ち上がる。そして、これが、神の民の間にふるいが行われる原因となるのである。(同上)

イエスがわたしたちに買わせたい金は火で精錬された金である。それは信仰と愛という、混ぜもののない金である。白い衣は、キリストの義、すなわちキリストだけが与えることのできる婚礼衣装である。目薬は、わたしたちの間で非常に乏しい、真の霊的識別力である。なぜなら、霊的事柄は霊的に判断されなければならないからである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 4 月 1 日)

12月11日

人を惑わす多くの教師たち

「また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。」（マタイ 24:11）

偽りの教師が起こって、あなたがたを細い道と狭い門から引きはなすであろう。彼らを警戒しなければならない。彼らは、羊の衣を着ているが、その内側は強欲なおおかみである。イエスは偽りの教師とまことの教師を見分ける方法をお教えになった。主は、「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか」と言われた（マタイ 7:16）。

わたしたちは彼らをそのりっぱな話や高尚な公言によってためすように命じられてはいない。彼らは神のみことばによって検討されるべきである。……これらの教師たちはどのような教えを伝えているであろうか。それはあなたに神を敬いおそれるようにさせるであろうか。それはあなたを、神のいましめに忠誠をつくさせ、神を愛するようにさせるものであろうか。もし人々が道徳律の重要性を感じないで、彼らが神の教えを軽んじ、彼らが神の律法の最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりするならば、彼らは神の御目には何の価値もないのである。わたしたちは彼らの主張が何の根拠もないものであることがわかる。彼らは、神の敵である暗黒の王の始めた同じ働きをしているのである。

キリストの名をとなえ、そのしるしをつけている者が皆キリストのものであるというわけではない。わたしの名によって教えた多くの者が、最後に足りないことを見いだされるであろうとイエスは言われた。……まちがっていながら自分は正しいと信じている人々がいる。……

弟子であると公言するだけでは何の価値もない。魂を救うキリストに対する信仰とは、多くの人が表明しているようなものではない。彼らは、「信じなさい、信じなさい、あなたは律法を守る必要はない」と言う。しかし、服従へ導かない信仰は臆断である。……だれも、特別な摂理や奇跡的なあらわれなどがあるからといって、彼らの働きやその主張する思想がまちがいない証拠であると考えてはならない。人々が神のみことばを軽んじて語り、自分の印象や感情や行動を神の標準以上に見なす時、彼らのうちには光がないことがわかるのである。

服従は弟子であることの試金石である。わたしたちの神に対する愛の真実性を証拠だてるのは律法の遵守である。わたしたちの受け入れる教理が心の罪の根を断ち、魂を汚れから清め、清きに至る実を結ばせるなら、わたしたちはそれが神の真理であることを知ることができる。博愛、親切、情け、同情がわたしたちの生活に現わされ、正しいことをする喜びが心の中にあり、わたしたちが自分ではなくて、キリストをあがめるならば、わたしたちの信仰は正しいものであると知ることができる。（祝福の山 180-183）

12月12日

終末時代の心霊術

「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。見よ、あなたがたに前もって言っておく。だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。」（マタイ 24:23-26）

サタンは狡猾な敵である。そして、悪天使にとって死んだ聖徒と罪人の姿を表し、これらの演出を人間の目に見えるようにすることは難しいことではない。これらの現れは、終わりの時代に近づくにしたがってますます頻繁になり、さらに驚くべき性質の展開が現れるようになる。……

高慢な心霊術者たちは大いなる自由を主張し、滑らかで華やかな言葉によって、狭くまっすぐな道を選ぶ代わりに、快楽と罪深い放縦という広い道を選ぶようにと、油断している魂を捕らえ欺こうとしている。心霊術者たちは神の律法の要求を束縛と呼び、これらに従う者たちは奴隷の恐れの生涯を送っているのだと言う。滑らかな言葉と美しい語り口で彼らは自分たちの自由を誇り、自分たちの危険な異端を義の衣で覆おうとする。彼らは最も不快な犯罪が、人類への祝福として見なされるようにと願う。

彼らは罪人の前に肉の心の促しに従い、神の律法、特別に第七の戒めを犯すために広い扉を開く。これらのむなしい大言を吐き、罪のうちの自由を勝ち誇る者たちは、自分たちが欺く者たちに神の表わされた御心に対する反逆方針において自由の楽しみを約束する。これらの惑わされた魂たちは、サタンの全くの捕らわれの身となっており、彼の力によって支配されているが、自分たちが選んだ同じ罪の方針にあえて従う者たちに自由を約束しているのである。……

わたしたちは彼らの輪に入るべきではなく、わたしたちの牧師たちは彼らとの論争に参加すべきではない。彼らはわたしたちが家に招くことも、あいさつすることもしてはいけないと特定されている部類の者たちである。わたしたちは彼らの教えを、神の表された御心と比較しなければならない。わたしたちは心霊術の調査に携わるべきではない。……わたしたちは彼らによって欺かれる必要はない。もしわたしたちが神のご命令に従うなら、どんなに心霊術者たちの言葉が滑らかで美しくても、彼らに共感することがないのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1883年4月12日）

12月13日

救い主キリストにすがりつく

「それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである……。龍は、女に対して怒りを発し、女のすえの残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」（黙示録 12:12, 17 英語訳）

神は、神の民を世の憎むべき罪悪から導き出して、彼らが神の律法を守ることができるようにしようとしておられる。そのために、「われらの兄弟らを訴える者」は、激しく怒っている。（人類のあけぼの下巻 375）

下からの勢力が、神の民を患難に陥れるような処置をとるようにと人々を動かす。サタンはわたしたちがキリストのみ言葉を成就することがないように、またこのお方と御父が一つであったようにわたしたちが一つとなり、そうすることによってキリストの神性についての決定的な証を世に対して担うことがないようにと、意見の相違や不和をもたらすことによって教会を弱めようとつねに努めているのである。しかし、わたしたちは信仰によってイエスを見なければならない。そうすれば、試練はその力を失い、敵のどんなわざもキリストにあるわたしたちの信仰を損なわせる力がないのである。なぜならわたしたちは、自分たちには、救うに力強い救い主がおられることを悟るからである。試練と悲しみの暗闇を通して、わたしたちはこのお方の手足と脇腹にある十字架のしるしを見分けることができ、栄光の主の声がこのように言うのを聞くのである。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある」。わたしたちの未来の永遠の生命全体は、わたしたちの名がこのお方のたなごころに彫り刻まれて、それがそこに留まるようにわたしたちが生きるか否かにかかっている。

わたしたちは自己否定と自己犠牲の道において、わたしたちの主に従うべきである。わたしたちは最も安易な道を選ぶべきではない。わたしたちが歩くように要求される道は、生きた信仰を働かすことを必要とする。なぜなら、わたしたちが患難のうちに喜び、わたしたちを取り囲む道徳的な暗闇にむかって変わることのない光線を輝かせるのは、信仰によってだからである。……主は生ける天の家族の一員にふさわしいものとする品性の型を、わたしたちが受けることを望まれる。わたしたちは暗闇と死の影にいる者たちに、光を降り注ぐべきである。わたしたちは自分たちの能力、すなわち神がわたしたちに授けられた力を最大限に用いることによって、自分たちのタラントを両替人に預けるべきである。イエスは、あなたが天にある邸宅の場所にふさわしい者かを判断するために、そしてあなたをご自分の家族の子供、天の王の臣民として家に集めるために、今あなたがどのようにふるまっているかを調べるために見守っておられる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1892 年 3 月 28 日）

冷ややかさに直面しても耐え抜く

「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（マタイ 24:12, 13）

キリストがこの地上におられたとき、世はバラバのほうを選んだ。そして今日も、世と教会は同じ選択をしている。裏切りと拒絶の光景、またキリストの十字架がこれまで再演されてきたが、再び巨大なスケールで演じられるであろう。民衆は敵の特質で満たされ、彼らに対し、敵の欺瞞は大きな力を持つであろう。ちょうど光が拒絶される度合いに応じて、誤解といさかいが起こるであろう。キリストを拒絶し、バラバを選ぶ者たちは、破滅的欺瞞の下で働く。虚偽の陳述と証言が、おおっぴらな反逆へと育っていく。目が悪にくらまされると、体全体が暗闇に満たされる。キリスト以外であればいかなる指導者にでも愛情を注ぐ者たちは、自分自身が身も魂も心も魅惑的なものの支配下に置かれているのを見出すようになるが、それが非常に魅惑的であるため、魂はその力のもとで真理を聞くことからそらされ、偽りを信じるに至るのである。彼らは罠にはまり、捕らえられる。そして彼らのすべての行動によって、「バラバをゆるし、キリストを十字架につけよ」と叫ぶのである。

今もなお、この決断が下されている。十字架において繰り広げられた場面は再演されている。真理と正義から離れた教会において、神の愛が魂のうちに永続的な原則でなくなるとき、人の性質は何をすることができ、また何をするようになるかが明らかにされている。わたしたちは、今起こりえるどんなことにも驚く必要はない。不敬な足で神の律法を踏みつける者たちは、イエスを侮辱して裏切った人々と同じ精神を抱いている。良心のどんな呵責もなく、彼らは自分たちの父である悪魔の業を行うであろう。彼らはユダの裏切りの唇から出た質問をする、「わたしがもしイエス・キリストを裏切ってあなたに引き渡せば、何をいただけますか」と。今でもキリストは、ご自分の聖徒たちというかたちで裏切られている。

キリストの生涯と死の歴史を見るとき、もし世がふまじめで不誠実であったとしても、驚くことがあろうか。わたしたちの時代には、人を頼みとし肉なるものを自分の腕とすることができるだろうか。キリストをわたしたちの指導者として選ぶべきではないか。キリストだけが、わたしたちを罪から救うことがおできになる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1900 年 1 月 20 日）

不法が行き渡っているので、男女が霊的にしっかりと目を覚まし続けるために断固とした努力をするべきときは、今である。自分たちの初めの愛を維持する者たちは救われる。（原稿 18 巻 178）

12月15日

愛のうちに繰り返される警告

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。すべての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである』。わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』」（黙示録 18:1-4）

第二の天使によって与えられた、バビロンが倒れたというメッセージは、1844年以来教会に入りこんでいる堕落についての警告がつけ加えられて、くりかえされている。この天使の働きは、最後の大いなる働きにおいて第三天使のメッセージが大いなる叫びとなってもりあがるちょうどその時に始められる。神の民はこのようにして、まもなく会わねばならない誘惑の時に立つ準備ができるのである。（初代文集 448）

しかし神は、まだバビロンの中にご自分の民を持っておられる。そして、神の刑罰が下る前に、これらの忠実な人々を呼び出して、彼らがその罪にあずからず、「その災害に巻き込まれないように」しなければならないのである。そこで、この天使―天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使―によって象徴されているところの運動が起こる。この天使のメッセージと関連して、「わたしの民よ。彼女から離れ去れ」という呼びかけが聞かれる。これらの布告は、第三天使のメッセージとともに、地上の住民に与えられる最後の警告なのである。（各時代の大争闘下巻 372）

繊細な人は、自分たちの前にある争闘と試練を見るとき、まもなくやってくる裁きについて世に警告することにおいて負わなければならない義務からしり込みする。彼らはその粗野な接触が、自分たちの魂を汚すことを恐れる。しかし、わたしたちはだれ一人として、尊い香水のように、その香りが抜けることのないようにと蓋をすべきではない。

（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1884 年 7 月 22 日）

あわれみに満ちた最後の光、世界に伝えるべき最後のあわれみの使命は、神の愛の啓示である。神の子らは、神の栄光をあらわさなければならない。彼らは、その生活と品性において、神の恵みが彼らのためにどんなことをなしたかを表わさなければならない。義の太陽の光はよい行ない、―真のことば、清い行ないなどによって、輝き出なければならない。（キリストの実物教訓 392）

わたしの名が裁きで取り上げられるのはいつか

「そのとき、ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、ひとりは取り残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残されるであろう。だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたには、わからないからである。このことをわきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさましていて、自分の家に押し入ることを許さないであろう。だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである」（マタイ 24:40-44）

真の約束の国が、わたしたちの眼前にある。そして、サタンは、神の民を滅ぼし、その嗣業を受けさせまいとしている。「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」という勧告が、今ほど必要な時はない。わたしたちは、今、大いなる贖罪の日に生存している。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間、すべての者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、身を悩まさなければならなかった。もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名がいのちの書にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に身を悩まさなければならない。わたしたちは、心を深く忠実に探らなければならない。多くの自称キリスト者がいだいている軽薄な精神は、捨て去らねばならない。わたしたちを打ち負かそうとする悪癖に勝利しようとする者は、みな、はげしく戦わなければならない。準備は、一人一人がしなければならない。わたしたちは、団体として救われるのではない。一人の者の純潔と献身は、これらの資格を欠く他の人の埋め合わせにはならない。すべての国民が神の前で審判を受けるのであるが、しかし神は、あたかもこの地上にその人一人しかいないかのように、厳密に一人一人を審査されるのである。すべての者が調べられねばならない。そして、しみもしわもそのたぐいのものがいっさいあってはならないのである。

贖罪の働きが終結しようとするときの光景は、実に厳粛である。そこには、実に重大な意義が含まれている。審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。まもなく―その時がいつかはだれも知らないが―生きている人々の番になる。神のおそるべき御前で、わたしたちの生涯が調査されねばならい。今は、他のどんな時にもまさって、すべての者が救い主の勧告に心をとめるべき時である。「気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである」（マルコ 13:33）。（ｺﾞｽﾍﾟﾙ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 8 月 1 日）

12月17日

ぬぐい去られる罪

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて」（使徒行伝 3:19, 20）

肉が霊に反し、霊が肉に反する絶え間ない戦いがある。魂のうちに抱かれている汚れが、純潔で聖化させる真理にあらがって戦うのである。ある者たちは、もしわたしたちが一度恵みのうちにあれば、つねに恵みのうちにあるのだという考えを提示した。しかし、わたしたちの働きは、日毎に勝利することである。試みはあらゆる方向に迫っている。わたしたちはそれらに抵抗し、キリストの御名によって勝利者となるだろうか。

わたしたちが神の子となる時、わたしたちの名が小羊の命の書に記され、それは調査審判のときまでそこに留まる。その時、すべての者は各自の名前を呼ばれ、彼の記録が、「わたしはあなたのわざを知っている」と言われるお方によって調べられる（黙示録 3:8）。もしその日に、わたしたちのすべての悪行が十分に悔い改められていないということが明らかになるなら、わたしたちの名は命の書から消され、わたしたちの罪はわたしたちを訴えるであろう。もし信者と公言する者が自信をもつようになり、あるいはまた言葉や精神において神の聖なる律法の最も小さな戒めを破るならば、彼はイエスを誤り伝えているのであり、裁きにおいて、命の書から彼の名を消し去れ、彼は不義を働く者であるとの恐るべき言葉が語られるであろう。しかし御父は、疑いと試みで悩まされていたとしても、自己を信用せず、神を畏れる魂を憐れまれる。イエスは彼のために嘆願され、御父とご自分の聖天使たちの前で彼の名を言い表される。

わたしたちの裁判官なるお方は、わたしたちのわざをご存じである。このお方は試みと試練の一つ一つを理解なさる。……このお方はすべての魂を囲んでいる状況をご存じである。このお方はわたしたちの弱さをご存じであり、わたしたちの弱さを思いやることのできるお方である。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」とヨハネは言っている（ヨハネ第一 2:1）。ああ、イエスの御名はなんと尊いものであろう！このお方が御父の前で言い表される一つ一つの名は、なんと尊いものだろう！わたしたちの慈悲深い贖い主が、哀れな悔い改めた罪人に、彼はわたしのものである、わたしは彼の名をわたしのたなごころに彫り刻んだと言われるとき、わたしは命の書から彼の名を消し去ることをせず、彼の罪はもう彼に対して思い出されることはないという答えが返ってくる。

約束は「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」である（イザヤ 27:5）。キリストの血には罪を取り除く力がある。哀れな震える魂よ、今日あなたは望みをいだく捕らわれ人である。イエスは生きておられる。このお方が生きておられるので、あなたも生きることができるのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1885 年 8 月 6 日）

傷のない者となることを目指しなさい

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。……彼らは、……小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。……彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」(黙示録 14:1, 4, 5)

もしわたしたちが勝利のうちにこのお方と共に、このお方の御座に座ることを願うならば、キリストの苦しみにあずかる者とならなければならない。わたしたちが自己満足という安易な道を選び、自己否定におびえる限り、わたしたちの信仰は決して堅くなることはなく、イエスの平安も、また勝利を自覚することによってもたらされる喜びも知ることができない。神と小羊の御座の前に立つ贖われた群衆の最も高められた者たちは、白い衣をまとい、勝利する争闘を知っている。なぜなら彼らは大いなる患難を通って来たからである。(教会への証 5 巻 215)

兄弟がた、準備の大いなる働きにおいて、あなたは何をしているだろうか。世と一つになっている者たちは、世の型を受け、獣の印のために準備している。自己を信頼せず、神の御前で自分たちをへりくだらせ、真理に従うことによって自分たちの魂を清めている者たちが、天の型を受け自分たちの額に神の印を受ける準備をしているのである。法令が出され、印がおされるとき、彼らの品性は永遠に清くしみもないまま残るのである。

準備するときは今である。神の印は決して不純な男女の額におされることはない。それは決して野心的で世を愛する男女の額にはおされることはない。それは決して偽りの舌や、欺きの心を持っている男女の額におされることはないのである。印を受けるすべての者たちは、神の御前にあってしみのない者―天への候補者でなければならない。(同上 216)

キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。

主イエス・キリストの再臨を待ち望むばかりでなく、それを早めることが、すべてのクリスチャンの特権である (ペテロ第二 3:12 文語訳参照)。キリストの名をとなえるすべての者が、神のみ栄えのために実を結ぶなら、福音の種は、どんなにすみやかに、全世界にまかれることであろう。世界の最後の大収穫は、急速に熟すであろう。そして、この尊い実を集めるために、キリストはおいでになるのである。(キリストの実物教訓 47)

12月19日

キリストはわたしを待っておられるだろうか

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」（マタイ 24:14）

だれでもみな字義通りの伝道者や宣教師になるように要求されているというのではない。それはわたしたちがみなキリストと共に働く者となって「よろこびのおとずれ」を同胞に伝えなくてはならないことを意味している。偉い人にも、凡庸な人にも、学問のある者にも無知な者にも、老人にも青年にも、すべての人にこの命令は与えられているのである。

このご命令を念頭におくとき、わたしたちはむすこや娘たちを、世間並みのりっぱな生活、名目だけのクリスチャンでキリストの犠牲に欠けた生活、真実のキリストから「あなたがたを全く知らない」との宣告をくだされるような生活―そうした生活のために教育すべきであろうか。

幾千幾万の人々がこういう教育をしている。彼らは、一方では福音の精神を拒みながら、子供たちのために福音の恵みを確保しようと考える。しかしそれは不可能である。奉仕においてキリストと交わる特権をしりぞける者はキリストと共に栄光にあずかる資格をあたえる唯一の教育をしりぞけているのである。彼らはこの世において品性に力ととうとさをあたえる教育をしりぞけているのである。子供たちのためにキリストの十字架を拒んだために、彼らを神と人類との敵に引き渡し、気がついたときにはもう手遅れになっている場合が少なくない。（教育 312, 313）

世に福音を与えることによって、神の日の到来を早めることがわたしたちのできることである。キリストの教会が主の命じられたように、任命された働きをなしたなら、全世界はすでに警告され、主イエスが力と大いなる栄光のうちに地に来ておられたことであろう。

キリストの再臨のメッセージには、生きた力が伴わなければならない。わたしたちは、主が戻られるという祝福の希望に多くの魂が改心することを見るまでは、休んではならない。使徒時代において、彼らが担ったメッセージは実際の働きをなし、魂を偶像から離れて生ける神に仕えるように向かわせたのであった。今日なされるべき働きは、同様に実際のものであり、真理は同様に真理である。ただ、わたしたちが主の来臨が近づくにつれて、さらなる熱心さをもってメッセージを伝えるべきなのである。この時代へのメッセージは明確で単純で、最も重大なものである。わたしたちはそれを信じている男女のように行動しなければならない。待ち、見張り、働き、祈り、世に警告する。これがわたしたちの働きである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1813 年 11 月 13 日）

奉仕の精神が教会全体にゆきわたって、教会員が残らず各々の才能に応じて主のために働くのを、神は長いあいだ待っておられる。（患難から栄光へ上巻 116）

後の雨の力の下に

「だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい」（ヤコブ5:7, 8）

わたしたちは天から後の雨を受けるに先立って、すべての利己心を自分たちの心から空にして、清めているであろうか。（ﾋｽﾄﾘｶﾙ・ｽｹｯﾁ・ｵﾌﾞ・SDAﾐｯｼｮﾝ155）

キリストの体の肢体は、彼らの最後の戦いのとき、ヤコブの悩みのときが近づくにつれて、キリストに向かって成長し、十分に彼の御霊にあずかるのである。第三天使のメッセージが大きな叫びへと高まり、大いなる力と栄光が最後の働きに伴うにつれて、忠実な神の民はその栄光にあずかるのである。それが彼らを生き返らせ、悩みのときを通過させるために力を与える後の雨である。彼らの顔は第三天使に伴う栄光の光で輝くのである。（教会への証1巻353）

わたしはまた、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。

わたしは、多くの人々が、必要な準備をおろそかにしていながら、主の日に立ち得て神のみ前に生きるにふさわしいものとなるために、「慰めの時」と「春の雨」（後の雨）とを待っているのを見た。ああ、わたしは、なんと多くの人々が、悩みの時に、避け所がないのを見たことだろう。彼らは必要な準備を怠った。だから、彼らは、聖なる神の前に生きるのに適したものと彼らをするためにすべての者が持たなければならない慰めを、受けることができなかった。（初代文集149）

わたしたちのうちだれ一人として、自分たちの品性に一つのしみや汚れがある間は、決して神の印を受けることがない。わたしたちの品性にある欠点をいやし、魂の宮からすべての汚れを清めることが、わたしたちに残されている。その後、前の雨がペンテコステの日に弟子たちの上に下ったように、後の雨がわたしたちの上に下るのである。（教会への証5巻214）

わたしたちは後の雨のために用意しなければならない。地は第三天使の栄光によって明るくされるべきである。すなわち小さな片隅だけではなく全世界が明るくされるべきである。あなたは今自分がしている働きは無駄だと思うかもしれないが、わたしはあなたに言う、それは無駄ではない。そのメッセージが大いなる叫びと共に伝えられるとき、今真理を聞く者たちは前線へ飛びだし、強力な力によって働くであろう。しかし、あなたは信仰を持たなければならない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1887年5月10日）

12月21日

困難が激しさを増す

「戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである。そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう」（マタイ 24:6-10）

このすべてを〔初期の〕クリスチャンたちは耐えた。父母は自分の子供たちを裏切った。子供たちは自分の両親を裏切り、友人は自分たちの友人をサンヒドリンに引き渡した。……

ご自分の証人たちの逮捕、裁判、また監禁において、神はご自分を現された。このお方は彼らに語る言葉を与え、真理を擁護し、ご自分を神の御子として認めるために舌と声をお与えになった。……彼らを殺すことによって、ユダヤ人たちは神の御子をまたもや十字架につけたのであった。

再びそのようになる。しかし争闘が行われるのは、第七日目の安息日をめぐってである。この世の権威者たちは宗教的自由を制限するために、彼らの誇りと力によってたち上がり、法律を制定する。彼らはネブカデネザルのように、神だけのものである権利をわがものとし、神だけが支配することのできる良心を強制することができると考えるのである。今でさえも彼らはそれに着手しており、彼らは自分たちが越えることのできない境界線に達するまで、これを前進させるのである。その時、神は戒めを遵守するご自分の忠実な民のために介入なさる。……

迫害がおこるところではどこでも、観衆はキリストに賛成か反対かを決定する。迫害のために、多くの者たちはつまずく。真理の原則は彼らの習慣に対して真っ向から切りつける。そして、彼らはよろめいて倒れ、かつて彼らが支持していた信仰を捨てるのである。真理を愛すると公言した多くの者たちはその時、彼らが真のぶどうの木と生きたつながりを持っていないことを示す。彼らは実を結ばない枝のように切り取られ、不信者たちや嘲笑する者たちやあざける者たちと共に束ねられる。

試練のときに信仰を捨てる者たちは、自分たちの安全を確保するために、偽証し自分の兄弟たちを裏切る。彼らは、自分の兄弟たちがどこに身を隠しているかを教え、狼に彼らを追跡させるのである。キリストは、わたしたちが友達や親族がたどる残酷で不自然な行動に驚かされることがないようにと、これについてわたしたちに警告された。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1896 年 12 月 20 日）

12月22日

まもなく発布される布告を考えて

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな」（マタイ 24:15-18）

今は神の民にとって、世に自分たちの愛情をそそいだり、自分たちの宝をたくわえたりすべき時ではない。初期の弟子たちのように、わたしたちが寂しい人里離れたところに逃げるように強いられるときは、遠い先のことではない。ローマの軍隊によるエルサレムの包囲が、ユダヤのクリスチャンにとって逃げるようにとの合図であったように、法王教の安息日を強制する布告においてわが国が権力を掌握するとき、それはわたしたちに対する警告となるのである。その時が、山間の人里離れた場所にある隠れ家へと比較的小さな都市を離れるに先立って、大都市を離れる時である。そして今、この地上において贅沢な住居を求めるかわりに、わたしたちはもっと良い、天にあるふるさとに移る準備をしているべきである。わたしたちの財産を自己満足に費やすかわりに、わたしたちは節約することを学んでいるべきである。神から貸し与えられている一つ一つのタラントは、世に警告を与えることによってこのお方の栄光のために用いられるべきである。神は都市においてご自分の共労者がなすべき働きを持っておられる。わたしたちの伝道地が維持されなくてはならないし、新しい伝道地が開かれなければならない。この働きを首尾よく前進させるために、出費は小額ではすまない。この時代のための真理を聞くために人々を招くことのできる礼拝の家が必要である。まさにこの目的のために、神はご自分の管理者たちに資本金を任せられたのである。あなたの資産が世的な事業にしばられて、この働きが妨げられるようなことがないようにしなさい。あなたの資産を、あなたが神の御事業の益のために管理できるところに置きなさい。あなたがいく前に、あなたの宝を天に送りなさい。

教会員は個人的に自分自身と自分たちの資産をすべて、神の祭壇に置くべきである。……自分たちの財産を大きな家や土地や世的事業にしっかりと結び付けている者たちは、自分たちの行動によって、次のように言っているのである。神にお渡しするわけにはいかない。わたしは自分でそれをもっていたいのである。彼らは自分たちの一タラントをナプキンに包み、地に隠した。そのような人々には警告されるべき理由がある。兄弟がた、神はあなたがたに怠けたり、むやみに欲しがってとっておいたり、隠したりするために財産を任されたのではない。そうではなく、ご自分の御事業を進展させ、滅びる魂を救うために用いられるようにと任せられたのである。（教会への証 5 巻 464, 465）

12月23日

獣の像

「わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」（黙示録 13:11-14）

神の民には天来の力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の時に対する備えができていた。彼らは、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰めを受け、生けるあかしが復活していた。最後の大いなる警告が至る所で叫ばれ、それはメッセージを受け入れたくない地上の住民をわき立たせ、怒らせた。（生き残る人々 452）

わたしは、神が、安息日を理解してもいなければ守ってもいない子供たちを持っておられるのを見た。彼らはまだ安息日についての光を拒んではいなかった。悩みのときの開始にあたって、わたしたちが聖霊に満たされたとき、わたしたちは出ていってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えた。このことは諸教会と名目的再臨信徒たちを激怒させた。彼らは安息日の真理に反論することができなかったからである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1851 年 7 月 21 日）

「悩みの時の開始」とここに言われているのは、災害が降り始めるときのことではなくて、キリストがまだ聖所におられて、災害がくだり始める直前の短い期間をさしている。（同上 173）

ヨハネは新しい権力を見た……すなわち神の教会と律法に反して戦いをいどむ最後の権力が小羊のような角を持つ獣によって象徴されているのを見た。これまでの獣は海から上がってきたが、これは地から上がってきて、その角が象徴している国家の平和な起源を表していた。小羊のような二本の角は合衆国政府の二つの基礎的原則である共和主義とプロテスタント主義のうちに示されているように、合衆国の特徴を良く表している。……

しかし預言的な筆は恐ろしい道筋をたどり、この平和な場面に起こる変化を明らかにしている。小羊のような角を持った獣は、龍の声で語り、「先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた」（黙示録 13:12）。預言は、彼が地に住む者たちに、獣の像を造るべきであると言うということを宣言している。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1899 年 11 月 1 日）

獣の刻印が強いられる

「また、〔小羊のような角を持つ第二の獣は〕小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である」(黙示録 13:16-18)

神の御霊が、地上から引き上げられつつある。憐れみの天使が、その翼をたたんで立ち去るとき、サタンは長く待ち望んでいた邪悪な行為を実行するのである。嵐と暴風雨また戦争と流血―これらの事をサタンは喜び、このようにすることによって、彼は自分の計画を完成するのである。そして、人間は完全に彼に欺かれるので、これらの災害は、週の第一日を冒涜した結果であると宣言するようになる。一般の教会の講壇から、日曜日が尊ばれねばならないほどに尊ばれていないので、この世界は罰を受けているのだと言う声明が出されるであろう。人々がこれを信じるためには、想像力を多く働かせる必要はないであろう。彼らは敵によって導かれているのであるから、全く偽りの結論に達するのである。

サタンは世界を自分のものであると主張するが、彼のたくらみに抵抗し、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために熱心に戦う小さな群れがある。サタンは戒めを守る人々を滅ぼそうと努める。しかし、神は彼らを守るやぐらである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1901 年 9 月 17 日)

日曜日に働くことを避けることは、獣の刻印を受けることではない。こうすることによって働きの利益を促進されるならば、そうすべきである。わたしたちはわざわざ日曜日に働くべきではない。

働きが日曜日になされるならば迫害が起こされるほど、反対が強い場所においては、安息日を神聖に守った後に、わたしたちの兄弟たちがその日を真の伝道の働きをする機会にするようにさせなさい。病人や貧しい人を訪問し、彼らの必要に仕えるようにさせなさい。そうすることによって彼らは、個人や家族に聖書を開く良い機会を見出すであろう。このようにして、最も有益な働きが主人のためになされることができる。安息日の光を聞き見る者たちが、神の聖なる日を守るために真理に立つ時、困難が生じる。なぜなら男女を神の戒めを犯すように強いるために、彼らに反して努力がなされるからである。ここで彼らは、神の律法に違反することのないように堅く立たねばならない。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1911 年 4 月 6 日)

12月25日

史上最悪の惑わし

「サタンも光の天使に擬装するのだから」（コリント第二 11:14）

地上のあちらこちらで、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現われる（黙示録 1:13-15 参照）。彼をとりまいている栄光は、これまで人間の目が見たどんなものも及ばない「キリストが来られた、キリストが来られた」という勝利の叫びが、空中に鳴り響く。人々が彼をあがめてその前にひれ伏す。……安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするようにと命じる。……

しかし、神の民は欺かれない。この偽キリストの教えは聖書と一致していない。彼の祝福は、獣とその像を拝む者、すなわち、神のまじりけのない怒りがその上に注がれると聖書が断言しているその人々に対して、宣言されているからである。さらに、サタンにはキリストの来臨のありさまをまねることは許されない。聖書は次のように教えている。「ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」（マタイ 24:27）、「彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目……は、彼を仰ぎ見るであろう」（黙示録 1:7）、このお方は「天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる」（テサロニケ第一 4:16）、このお方は「栄光の中にすべての御使たちを従えて来る」（マタイ 25:31）、「彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ 24:31）。真理の愛を受けた者だけが、世界をとりこにする強力な惑わしから守られる。聖書のあかしによって、これらの者は欺瞞者サタンの変装を見破る。

すべての人に試みの時がやってくる。試みのふるいによって、ほんもののキリスト者が明らかにされる。神の民は、自分の感覚的証拠に屈しないほど、今神のみ言葉に固く立っているだろうか。こうした危機においても、彼らは聖書に、しかも聖書だけにすがりつくだろうか。サタンは、できることなら、彼らがその日に立つ備えをするのを妨げようとする。サタンは彼らの道をふさぎ、この世の宝で彼らを迷わせ、重くて疲れさせる荷を負わせて、その心をこの世の煩いでいっぱいに満たし、試みの日が盗人のように彼らを襲うようにと、事を運ぶであろう。（預言の霊 4 巻 442-444）

12月26日

大いなる悩みの時

「それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむかい、『さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ』と言うのを聞いた。……それから、〔第二の獣は〕その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた」(黙示録 16:1; 13:15)

だれも、やがてヤコブの悩みの時に、自分たちに望む激しい試練の光景を考えて、落胆しないようにしよう。彼らはかの日のためではなく、今日のために熱心に心を用いて働くべきである。わたしたちに欠乏しているものは、キリストのうちにあるがままの真理の知識や、個人的な経験をいま持つことである。猶予期間の貴重な最終時間に、わたしたちにはわがものとすべき深く生きた経験がある。このようにしてわたしたちは、悩みの時に救済を保証される品性を形成するのである。

悩みの時は、キリストのような品性が発揮される炉である。それはまた神の民を導いて、サタンとその誘惑とを拒絶させるように計画されている。最後の試練は神の民にサタンの本来の性質、すなわち残酷な暴君であることをあらわす。そして、それは彼らのために他の何ものもできないことをなす。すなわち彼らの愛情からサタンを完全に根絶するのである。罪を愛しそれを大切にすることは、キリストの致命的な敵である罪の張本人を愛し、大切にすることである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1884 年 8 月 12 日)

今、国々は怒りつつあるが、わたしたちの大祭司が、聖所における働きを終えて立ち上がり、報復の衣をまとわれるときに、いよいよ最後の七つの災いが注がれるのである。四人のみ使いが、聖所におけるイエスの働きが終わるまで、地の四方の風を引き止めており、その後で、七つの災いがくだるのを、わたしは見た。これらの災いは、悪人たちに、義人たちに対する激しい怒りを抱かせた。彼らは、わたしたちが彼らの上に神の刑罰をもたらしたのであって、わたしたちを地上から除けば災いがやむと考えた。聖徒たちを殺す布告が発せられた。そのために聖徒たちは、昼も夜も救いを叫び求めた。これがヤコブの悩みの時であった。そのとき聖徒たちは、みな心を悩まして叫び求め、神のみ声によって救い出された。十四万四千人は勝利した。彼らの顔は神の栄光に輝いた。それから、わたしは苦悩のうちに叫んでいる一団の人々を示された。……「この人々は、一度は安息日を守ったがやめてしまった人々です」と天使は言った。……彼らは深い流れの水を飲んだのに、その足で残りの水をにごらせた、―安息日を足の下にふみにじった―こと、そして、そのために彼らは、はかりで量られて、その量の足りないことがあらわされた。(現代の真理 1849 年 8 月 1 日)

12月27日

キリストの来臨

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう」（テサロニケ第一 4:16, 17）

イエスは、来られる。しかし、それは、初臨の時にベツレヘムの赤子として来られたような姿でではない。また、弟子たちが神を讃美して、大声で叫ぶ中を、ろばに乗ってエルサレムに入っていかれたように来られるのでもない。彼は、天の父の栄光のうちにすべての聖なる天使たちを従えて、この地上に来られるのである。全天には、天使がいなくなる。彼がオリブ山から昇天されたときに、「ガリラヤの人々」が（使徒行伝 1:11）天を仰いだように、彼を待ち望む聖徒たちは天を仰ぐのである。その時、聖なる人々、すなわち、柔和な模範に完全に従った人々だけが、彼を仰ぎ見て、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と（イザヤ 25:9）、熱狂的な喜びに満たされて叫ぶのである。そして、彼らは、「終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる」（コリント第一 15:51）。そのラッパによって、眠っている聖徒たちは呼び醒まされ、土の床から輝かしい不死をまとって出てきて、「勝利した！死と墓とに勝利した！」と叫ぶ。それから、栄化された聖徒たちは、天使たちと共に引き上げられて、空中で主に会い、彼らの愛する者から二度と別れることはないのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1852 年 6 月 10 日）

すべての者は、わたしたちが今生きている時の短さと、厳粛さを悟ろうと努めるべきである。今は自己に仕え、自分自身と自分の子供たちのために資産を確保することに費やすべき時間はない。まもなく変動が起こる。物事の順序があらたにされなければならない。……二度目の裁判はない。恩恵期間は永久に終了する。地上における神の律法の要求に関するすべての不信は止む。なぜなら、すべての者が裁かれるのは、この標準によってだからである。その時、すべての目はこのお方を見る。そして、すべての魂は何が自分の破滅となったかを悟る。神の律法が、すべての被造物の知性を統治することがあきらかになり、認められるのは、その時である。このお方の権威を疑問に思う者は一人もいない。あざける者たちは、もはやこのお方の来臨の約束はどうなったのかと言うこともなければ、特別な民が自分たちの主の現われを信じ、待っていたことを不思議に思うこともない。その理由は、すべての者にはっきりするのである。このお方の来臨は、この世の歴史の最大の出来事である。このお方のすべての戒めに敬意を払ってきた者たちは、忠実で真実な者たちに分類され、永遠の生命をもって報われるのである。（同上 1886 年 1 月 12 日）

王や祭司に任じられる

「見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した」(黙示録 20:4)

キリストがこられる時、悪人は、全地の表面から一掃される。すなわち、主イエスの口の息によって殺され、来臨の輝きによって滅ぼされる。キリストはご自分の民を神の都へ連れて行かれ、地には住民がいなくなる。……(各時代の大争闘下巻 440)

千年の間、サタンは、荒れ果てた地上をさまよい歩いて、自分が神の律法に反逆した結果をながめる。啓示者は、主の再臨と悪人の滅亡の光景とサタンの監禁の預言を示した後に、「千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた」と宣言している(黙示録 20:3)。

第一と第二の復活の間の千年間に、悪人の審判が行なわれる。ダニエルは、日の老いたる者がきて、「いと高き者の聖徒のために審判をおこなった」と言っている(ダニエル 7:22)。……パウロが、「聖徒は世をさばく」と予見したのは、この時のことを指しているのである(コリント第一 6:2)。彼らはキリストと共に悪人を審き、その行為を法規の書すなわち聖書と照らし合わせ、それぞれのなしたわざに従って、すべての者に判決を下す。サタンと悪天使たちも、キリストとその民によってさばかれる。(見張り人 1905 年 3 月 14 日)

さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。そして、神の残りの民は許され、受け入れられるだけではなく、誉を与えられるのである。「清い帽子」が彼らの頭にかぶせられた。彼らは神のために王、また祭司となるのであった。サタンが告発をし、この一団を滅ぼそうとしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、彼らに生ける神の印を押していた。(教会への証 5 巻 457)

12月29日

清めの火

「主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。」（ペテロ第二 3:10）

それからイエスは、聖徒とともにオリブ山に降りて来られる。そして、山は裂けて神のパラダイスが基をおく大きな平原となる。（千年の終わりに）悪人たちがよみがえらされ、都を取りかこむまで、地の他のところが清められることはない。なぜなら、悪人たちの足は、新しくされた地を汚すことはないからである。そのとき、火が天の神のところから下って来て彼らを滅ぼし、根も枝もともに焼きつくす。サタンが根で、その子供たちが枝である。悪人たちを焼きつくした同じ火が、地を清めるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1850 年 4 月 1 日）

千年の終わりに第二の復活がある。その時に、悪人はよみがえらせられる。そして、「記された審判」の執行を受けるために、神の前に現われる。こうして、黙示録の記者は、義人の復活を描写したあとで「それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった」と言っている（黙示録 20:5）。（各時代の大争闘下巻 445）

悪人は地上でその報いを受ける。「主は悪しき者の上に炭火と硫黄とを降らせられる。燃える風は彼らがその杯にうくべきものである」（詩篇 11:6 参照）。神が火を天から降らせられる。地上は破壊される。深いところに隠されていた武器が引き出される。焼き尽くす炎が大きく開いたあらゆる裂け目から噴き出す。岩そのものが火となっている。炉のように燃える火が来た。激しい熱で自然界を構成しているもの、大地さえも溶け、そこで作られたものは燃やし尽くされる。「万軍の主は言われる、……悪を行う者は、わらのようになる。その来る日には、彼らを焼き尽くし……」（マラキ 4:1）。皆、「その行いにしたがって」罰せられる（詩篇 28:4）。

きよめの火によって、悪人たちは根も枝もついに滅ぼされた。サタンが根であり、サタンに従う者たちが枝である。律法の刑罰は全部くだり、正義の要求は果たされた。天と地はこれを見て、エホバの義を宣言する。……

悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。地獄の火が永遠に燃え続けて、贖われた者たちの前に罪のおそるべき結果をいつまでも示す、などというようなことはないのである。（見張り人 1905 年 3 月 14 日）

新天新地

「わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなくきずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい。」（ペテロ第二 3:13, 14）

真のキリスト者の喜びと慰めは、天になければならず、また、そうなるのである。来世の力と、天の喜びを味わった人々の心の熱望は、地上のことでは満足しない。このような人々は、ひまな時にも、なすべきことを十分に見いだす。彼らの心は、神にむかって引かれる。宝のあるところには、心もあるのであって、彼らは、自分たちが愛し礼拝する神との、楽しい交わりをもつのである。彼らの楽しみは、彼らの宝、すなわち、聖なる都、新しい地、彼らの永遠の故郷などを瞑想することである。彼らが、このように高く、清く、聖なることを考えているときに、天は、彼らに近づく。そして、彼らは、聖霊の力を感じる。そして、これは、彼らをますます世から引き離して、彼らの故郷である天に関することに、彼らの慰めと大きな喜びとを感じさせる。（初代文集 212, 213）

神の栄光に満ちた都には、12 の門があり、それは最も栄光に輝く真珠ですえられている。またそこには、さまざまな色の 12 の基がある。宮の通りは、純粋な金でできている。この都には、神の御座がある。そこから、純潔で美しい川が流れているが、その清らかさは水晶のようである。その輝く純潔と美しさは、神の都を喜ばせている。聖徒たちは、命の川の癒しの水を自由に飲む。

この美しい川の両側には命の木がある。そして、この地上において神を愛しこのお方の戒めを守った贖われた聖徒たちは、都の門を通って入り、その命の木の権利を持つ。彼らはわたしたちのはじめの両親たちが堕落以前に食べていたように、それから自由に食べる。その広く茂った不死の木は諸国民のいやしのためである。彼らのすべての悲しみはその時過ぎ去る。病気、悲しみや死を、彼らはもう再び感じることがない。なぜなら命の木の葉が彼らを癒したからである。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1852 年 10 月 1 日）

ここ、この地上にあってわたしたちは天の宮廷の場所を持つために、どのような者にならなければならないかを学ぶべきである。わたしたちは、天の宮廷の高等学校に連れて行かれる備えができるように、キリストがわたしたちに教えたいと望まれる教訓を学ばなければならない。そこでは、救い主がわたしたちを命の木の傍に導いて、わたしたちにこの地上においてわたしたちが理解することができなかった多くの事柄を説明され、神の奥義を教えられる。そこにおいてわたしたちは、この地上において見たことのなかった神の栄光を見るのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1905 年 7 月 20 日）

12月31日

わたしたちの良き羊飼いに信頼する

「そこで、子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、彼が現れる時に、確信を持ち、その来臨に際して、みまえに恥じいることがないためである」（ヨハネ第一 2:28）

まもなく、地上における神の働きは、勝利のうちに完了する。まもなく、最後までしっかりと残った者たちに、わたしたちの主の王国への十分な入り口が与えられる。……

新しくされた地において贖われた者たちを待っているすべての喜びの中の、最高のものの一つはわたしたちの声を、わたしたちが救うことを助けた者たちの声とあわせることのできる特権である。（ｺﾞｽﾍﾟﾙﾍﾗﾙﾄﾞ 1908 年 5 月 1 日）

ああ、わたしたちは御座の周りに集まって、キリストの義の白い衣にまとわれて、なんという幸福を味わうことであろう。悲しみは過ぎ去った。別離は過ぎ去った。その代わりに、永遠の絶え間ない時を通じて平和のうちに住み、幸福のうちに住み、栄光のうちに住むのである。わたしたちは、なんという幸せな、幸せな一団となることであろう！（説教と講和 2 巻 10）

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるおかた、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるおかた、そのおかたが、堕落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。（各時代の大争闘下巻 433, 434）

わたしたちは影のうちにではなく、十字架の救いの光のうちに立つべきである。このお方の最も尊い血によって清められた心をもって、またこのお方の御臨在の完全な意識のうちに、見えないけれども、わたしたちは「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」というみ言葉で魂を感激させるこのお方のみ声を聞くことができる（ヨハネ 14:27）。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 6 月 22 日）

無力のうちに、十字架の足元にひざまずきなさい。今日、神の御約束を信じなさい。イエスはわたしたちを計り知れない愛をもって愛しておられる。ああ、なんという愛、なんという比類のない愛をこのお方は人の子らに示してくださったことであろう！イエスはあなたが自分自身を改善するまで待つことを願われない。このお方はあなたがこのお方を今日、あなたの救い主とすることを願われる。……

このお方はわたしたちが一人も滅びることがなく、永遠の命を得ることを望まれる。しかし、このお方はわたしたちがご自分に、羊が羊飼いについていくように、ついていくことを望まれる。そして、やがてこのお方はわたしたちを生ける水に導き、わたしたちの目からすべての涙を拭い去ってくださるのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1890 年 3 月 17 日）

研究 8

神の憐れみの最後の招き

「わが契約」

神の契約を「アーメン」と受け入れた人々に、神の義の約束が成就します。その律法について、ガラテヤ 3:24 に、「キリストに導く養育掛となった」とありますが、これは、以前はそうではなかったことを表しています。しかし、アブラハムは、すでに心に律法が記されている者として、契約を結んだのでした。この契約を見てみましょう。

わが契約

「イスラエルの追いやられた者を集められる主なる神はこう言われる、『わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう』と。」（イザヤ 56:8）

この聖句は、異邦人が集められる時代のことであるのがわかります。そしてこの預言に基づいて、イエスは次のように言われました。

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう」（ヨハネ 10:16）。

この声は何でしょうか―これこそ、神の憐れみの最後の招き、すなわち信仰による義認を伝える第三天使の大いなる叫びであり、この声によって、このお方の羊がこのお方の囲いに集められるのです。

イザヤ 56 章は、58 章の安息日の回復がどのようになされなければないかを教えています。律法の回復、特に安息日の回復が求められています。しかし、古い契約を結んだ者には、律法を愛する心がありません。しかし、そのような者にも律法を下さったのは、「信仰によって義とされるため」でした。

「さて、この物語は比喩としてみられる。すなわち、この女たちは二つの契約をさす。そのひとりはシナイ山から出て、奴隷となる者を産む。ハガルがそれである」（ガラテヤ 4:24）。

これは、奴隷の守り方を示しています。
しかし、主は次のように言われます。

「主はこう言われる、『わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、わが契約を堅く守る宦官には、……また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は――』。」（イザヤ 56:4, 6）。
「それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである」（出エジプト記 19:5）

「わたしの契約を守る（keep）ならば」、つまり、主の契約をそのまま保つならば、大事にするならばという意味です。
それでは、神がわが契約と言われるこの契約について、どのように記されているでしょうか。

父 イザヤ 9:6; 契約 創世記 17:19; 永遠の福音 黙示録 14:6; 義 詩篇 119:142; 名 イザヤ 56:5; 黙示録 14 章の三重のメッセージとの関連：

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」（イザヤ 9:6）。
この約束を表す旧約の象徴の中で、これが永遠の契約であると言われます。
「神は言われた、『いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう』。」（創世記 17:19）。
それは、永遠の父によって立てられた永遠の契約であるため、「永遠の福音」です（黙示録 14:6）。
なぜなら、このお方の義、すなわち永遠の義をもたらしてくださるからです。
「あなたの義はとこしえに正しく（「永遠の義」英語訳）、あなたのおきてはまことです」（詩篇 119:142）。
「わが家のうちで、わが垣のうちで、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名を与える」（イザヤ 56:5）。

この「わが契約」こそ、アブラハムと結んだ新しい契約でした。なぜなら、こ

の契約は、神の約束に基づくものだからです。その証拠が、出エジプト記 19:4 にある「あなたがたを鷲の翼に載せて」と憐れみの言葉に表れています。

神が結びたいと願われたのは、この契約でしたが、イスラエルは自分たちが約束することによって契約を結んだと思っていました。つまり、それは「わが契約」ではなかったのです。

「わが契約」―神のなさること、神に起源のあるものは、すべて永遠です。

ノアと結ばれた契約の内容に「人間の発想」はありません。これこそ神が「わが契約」と呼ばれるものであり、その逆が「古い契約」です。しかし、古い契約、すなわち起源が自己にあるものは、何であっても必ず朽ちていきます。

神は、ノア及び共にいる子らに次のように言われました。「わたしはあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。…」(創世記 9:9)。この契約については、創世記 9:9-17 の中で 7 回言及されています。

「にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」(創世記 9:16)。

神の立てられる契約、これが永遠の契約であり、この契約を結ぶ唯一の方法が信仰です。なぜなら、信仰は、神がおできになることを信じるからです。真の信仰は、「わが契約」をそのまま全面的に信じます。

「主はこう言われる、『わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、わが契約を堅く守る宦官には、わが家のうちで、わが垣のうちで、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名を与える。また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は――』。」(イザヤ 56:2-4)。

人には何の希望も考えも存在しなかった時に、神は一方的にこの契約を立てて下さいました。そして、アブラハムは、この契約を「アーメン」と信じたので、契約が成就し、永遠の「義」と認められたのです。

MEMO

（48 ページの続き）
ご自分のみ父に対して持っておられたような、単純で幼な子のような信頼をこのお方に対して持たなくてはなりません。キリストは「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」と言われました（ヨハネ 15:5）。

彼らが園に近づくにつれ、救い主にとっておそろしい苦悩の夜が始まりました。これまでこのお方を支えてきた神さまのご臨在がもはやこのお方と共にないかのように見えました。このお方はご自分のみ父からしめ出されるということがどういうことかを感じ始められました。

キリストはこの世の罪を負わなければなりません。それらが今、このお方の上に置かれると、とても耐えられないものであるかのように思われました。罪の意識が非常に恐ろしく、このお方はもはや神さまがご自分を愛することがおできにならないのではないかという恐れに誘われました。

悪に対するみ父の恐ろしい不興をお感じになったとき、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」という言葉がこのお方からもれました。

園の門に近づかれると、イエスさまはペテロ、ヤコブ、ヨハネ以外のご自分の弟子たちをみな残して、この三人と共に園へ入って行かれました。彼らはこのお方の最も熱心な信徒であり、このお方の最も近い友でした。しかしこのお方は、彼らでさえご自分の苦悩を目撃させるのにしのびませんでした。このお方は彼らに「ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」と言われました（マタイ 26:38）。

このお方は彼らから少し離れたところへ行って、それから地面にひれ伏されました。このお方は罪のためにみ父から引き離されつつあることを感じられました。おふたりの間にある深淵があまりに広く、暗く、深く見え、このお方はその前におののかれました。

キリストはご自分の罪のためではなく、世の罪のために苦しんでおられたのでした。このお方は罪に対する神さまのご不興を、罪人が裁きの大いなる日に感じるように感じておられました。

半月餅

■材料（7 つ分）

餅粉	70g
薄力粉	30g
クルミ	20g
あんこ	130g
粗糖	30g
水	100ml

■つくり方

餅粉と薄力粉をふるっておきます。

あんこにクルミを入れて 7 等分にしておきます。

水に粗糖を溶き、その中にふるった粉を入れて混ぜます。すっと横に線を引き、消えるくらいの固さがちょうどよい固さです。必要に応じて、小さじ 1，2 杯くらいの水で調節して下さい。

フライパンに油をしいて、7、8 センチくらいの大きさに焼きます。

焼き上がった餅にあんこを入れて、半分に折ります。

■あんこを作る場合

あずき	250g
水	1 リットル
黒糖	100g
粗糖	100g
塩	少々

小豆を洗い、水と一緒に圧力鍋に入れます。

圧力がかかったら弱火にし、15 分そのままにします。

15 分たったら、火を消し、圧力が下がるまでそのままにしておきます。

炊き上がったら、砂糖と塩を入れて、味を調えます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

第33話

ゲッセマネにて（1）

地上における救い主のご生涯は祈りの生涯でした。多くの時間をこのお方は神さまとだけで過ごされました。しばしばこのお方はご自分の真剣な願いをご自分の天父にささげられました。こうしてこのお方は、働きにおいてご自分を支え、サタンの誘惑の下に倒れないようにご自分を守る力と知恵をお受けになりました。

過ぎ越しの夕食をご自分の弟子たちと食した後、イエスさまは彼らと共にゲッセマネの園へ行かれました。そこでこのお方はしばしば祈られたのでした。彼らと共に歩みながら、イエスさまは彼らと共に語り、彼らをお教えになりました。しかし、園に近づくにつれ、このお方は不思議にだまってしまわれました。

イエスさまは全生涯をご自分の御父のご臨在（りんざい）の中で生きてこられました。神のみ霊がこのお方の絶えざる導き手であり支えでした。

このお方は地上におけるご自分の働きでいつも神さまに栄光を帰し、次のように言われました、「わたしは、自分からは何事もすることができない」（ヨハネ 5:30）。

わたしたちは自分では何もすることができません。わたしたちが打ち勝ち、地上でこのお方のみ旨をなすことができるのは、自分のすべての力をキリストにより頼むことによってのみです。わたしたちもこのお方が

（43 ページに続く）